

「科学」のパラダイムシフト
—*The Calcutta Chromosome*を読む—

文09-529 田丸 仁

目次

.....	1
序章.....	2
第一章 「科学」.....	4
第二章 「反科学」.....	10
第三章 「科学」と「反科学」、そして新しい「知」.....	17
終章.....	23
参考文献.....	24

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

序章

今回、私は、アマタブ・ゴーシュの*The Calcutta Chromosome*を題材にし、「新しい知、新しい科学への見方」について論文を書いていく。ゴーシュは、世界的にも著名なベンガル系インド人の英語作家である。彼の作品の中には、1990年にフランスのメディスン賞を受賞した*The Circle of Reason*、同年、インドで有名なサーヒトヤ・アカデミー賞を受賞した*The Shadow Lines*や、2008年にイギリスで権威のあるブッカー賞候補に選ばれた*Sea of Poppies*などがある。こういった著名な作品からも、彼がポストコロニアル作家として大成した人物であることは、容易に想像がつくのではないだろうか。今回扱う彼の作品は、イギリスで優れたSF作品に贈られるアーサー・C・クラーク賞を1997年に受賞した*The Calcutta Chromosome*である。

この作品で論文を書く理由は、この作品が全体を通してフィクションでもありノンフィクションでもあるところに私は面白さを感じたためである。さらに、この作品が読者に時間を忘れさせるような面白みのある内容でありながらも、ポストコロニアル文学の一つとして考えられるためである。実在するロナルド・ロスという学者が、マラリアの感染ルートを発見し、ノーベル賞を受賞したことを軸にしながら、その発見の裏ではマンガラやラッチマン（ラアカン）という人物たちが組織する謎の集団が、ロナルド・ロスの発見を手助けしながら、不死の研究を進めていたというフィクショナルな物語の設定に、私は非常に面白さを感じたのである。ゴーシュは、マラリアという「科学」のテーマをフィクショナルな物語と交えることで、作品全体でフィクションとノンフィクションの境界線をわからなくし、一見絶対的に思える「科学」がいかにも不確実なものであるかを描いている。さらに、「科学」をポストコロニアルな観点から見えていこうとするところに、この作品の面白さがある。

特に私がこの作品で一番気になったことは、「知」に関することである。「知」というのはもちろん、「知識」や何かを「知っていること」である。私が物語を読んで気づいたことは、この本の中には、二種類の「知」が存在するということである。一つはロナルド・ロスを中心に展開する「マラリア」に関する科学的な「知」であり、もう一つはマンガラたちによって進められている「カルカッタ染色体」に関する非科学的な「知」である。この二つの「知」が物語の中でどのように描かれているのか、そのことについて考察していきたい。

このテーマは大きな意味で、なぜゴーシュは*The Calcutta*

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

*Chromosome*を書いたのか、ということにもつながるのではないかと私は考える。「科学」という西洋的イメージの強いテーマに、非科学的な要素が絡められて進むこの物語は、ある意味で「科学」への挑戦であると私は考える。私は、「科学」と「植民地化」には類似点があると考えている。というのも、「科学」と「植民地化」と聞くと、やはり西洋側から進められるものというイメージが強く、また、「科学」と「植民地化」の過程の中には、対象となるものを「知る」または「知ろうとする」という共通の部分があるためである。

「科学」では、実験の対象となるものを徹底的に研究し、分析する。一方「植民地化」では、対象となる国にはどういった民族がいて、どういった文化があり、どのような言葉が話すのか、どのような資源がそこにはあるのかを徹底的に調べる。このような「知る」という類似点から「科学」もポストコロニアルな観点から考えることができるのではないだろうか。

この論文は三章で構成する。一章目では、「科学」に関することを論じていく。「科学」は今われわれの生活において欠かせないものにまで成長しているが、その「科学」は本当にすべて信頼できるものなのか、「科学」はどれだけ確立されたものなのか、いかに可変的なものであるか、ということを書の考察を通して論じていく。二章目では、「科学」と正反対に位置する「反科学」に関して論じていく。この物語の大事なテーマである「反科学」は「科学」に影響を与えるものであり、「科学」とは違う見方を提供している。「反科学」は本書の中でどういう位置づけで描かれているのかを分析していく。最後の三章目では、「科学」と「反科学」に触れながら、「知」について考えていく。特に、作品に登場するアンタールの元同僚のムルガンの発言にある「知の不可能性を認める」という言葉は、ゴーシュの主張をそのまま代弁したかのようであり、このことについて考えながら、なぜゴーシュは反科学的な「知」を用いて *The Calcutta*

*Chromosome*を書いたのか、さらにゴーシュは「知」の問題を作品で扱うことで、読者に何を伝えようとしたのかを考えていく。

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

第一章 「科学」

科学のおかげで、今の世の中は便利なものが増えたことは間違いない。遠い場所に住む友人と連絡を取りたいければ、以前では手紙で時間をかけてやり取りしていたものが、今では電話やメールを使い、短時間で済むようになった。以前では調べものをする時は書物を用いたが、今では多くの人がインターネットを使い、短時間で調べものを片付けることができる。さらにこのインターネットを使えば、世界中の知らない人と連絡を取り合い、多くの人と知り合うこともできるようになった。本書の中にも出てくる鉄道について考えると、以前は歩いてどこか遠い場所まで出かけていたが、鉄道ができ電車が走るようになり、短時間で移動が可能になった。また、医学の世界でも科学の力は幅を利かせ、医療技術の発達のおかげで、人間の平均寿命は以前よりもかなり伸びた。今の時代、こういった技術の発達によりとても便利に生活ができ、科学は私たちにとって必要不可欠なものとなっているのは間違いないことである。

科学は確かに人間に多くの利益をもたらしている。物語の中でもそのことが顕著にあらわれる。*The Calcutta*

*Chromosome*は、主人公のアンタールが元同僚のムルガンのIDカードを見つけるところから物語が始まるのだが、このIDカードを見つけるのは、AVAという科学の発展で生み出された機械を通してである。AVAは目録作成作業を行う機械であり、アンタールは、私たちがパソコンを使って仕事をしているように、このAVAを使って仕事をしている。ここで考えたいことは、AVAは確かに科学の発達により作り出された機械であるのだが、この機械は同時に実在しないフィクショナルな機械であるということだ。AVAの驚くところは、モニター上で、ある物の一部から全体を複製するところや、多くの言語を使いこなすユーザーに話しかけたりするところである。ここまで発達した機能は、今のところ考えられないことである。こう考えると、明らかにAVAは科学の発達で生み出された機械でありながらも、フィクショナルな機械でもあるのである。確かにAVAは小説の中だけの機械である。しかし、実際にもAVAのように、科学の分野にフィクショナルな要素があるのではないだろうか。実際に、SF映画なども存在し、科学とフィクションの融合が語られることもある。

そこで私は、フィクション性の角度から科学に対してアプローチし、科学をどこまで信用していいのかということについて論じたい。科学というものは疑いのない、絶対的で確かなものなのだろうか。*The Calcutta*

*Chromosome*では、科学でも特に医学の問題であるマラリアに関して話が進められている

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

。このマラリアに関しても、「科学は信用できるものなのか」という問いが投げかけられる部分がいくつか見られる。

まず、物語の中で私が興味をそそられたのは、マラリアについての学説が、細菌説から原生動物説へと変わろうとする場面である。始めは、マラリアは細菌だと考えられていたのだが、ラヴェランという学者がマラリアは細菌ではなく原生動物であり、寄生虫であるという説を唱えた。このラヴェランは実在した学者で、マラリア原虫を発見した功績で1907年にノーベル賞を受賞している。この場面でファーレイという学者が現れるのだが、このファーレイを少し考察する。次の引用は、長い間、マラリアは細菌であると思いついてきたファーレイがインドにいる間に、原生動物説であるラヴェラン説が再評価されていると聞き、その真実を確かめようとする場面である。

Farley had left for India fully confident that Laveran's theory was headed for medicine's vast graveyard of discredited speculations: his astonishment at the news of its disinterment could not have been greater. Once introduced, these apprehensions of Laveran's theory revived gradually insinuated themselves into the young missionary's mind, creating doubt and disbelief where certainty had reigned before.¹

少し説明を加える。1880年、世界的にも有名なパスツールが、「マラリアは細菌である」と主張して研究していたわけだが、ラヴェランは「マラリアは原生動物である」という異論を唱えた。当時では細菌説が正しいと考えられていて、ラヴェランの言う原生動物説は、ほとんど相手にされなかった。しかし、1893年には、ラヴェランが唱えた原生動物説が正しいのではないかと考えられている。ここまでは史実に基づくものである。ここで、物語の中ではファーレイが登場し、ラヴェラン説を信じていなかった彼は、ラヴェラン説の再評価を聞き、驚きを感じているのである。ファーレイは、ラヴェランの説を信用に値しないものとして考えていた。パスツールの唱えた細菌説が一般的であり、マラリアは細菌であると確信していたためであろう。しかし、再びラヴェラン説に光が当たると、ファーレイに疑念と不信が芽生え始めたのである。疑念を持ち始めた彼は、この後、真相を突き止めるために、カルカッタにあるカニンガムの研究所を訪れるのである。

この場面は、科学の中で一度証明されたことでも、その後再び研究の対象とされ、もう一

¹ Ghosh, Amitav. *The Calcutta Chromosome*.p137
以下、本文からの引用は括弧内にページ数のみ記載する。

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

度その真実性が再考されることがあることを示している。実際においても、パスツールの説ではなく、ラヴェランの説が認められている。科学の分野でも一度証明されたからといって、それを鵜呑みにするのは楽観的すぎるという良い例になるのではないだろうか。確信があるところにも疑念がわき、一度証明されたことが変更されうことは、科学分野においても大いにあることであり、科学を安易に信用することには危険を伴うのである。こういった一連の流れは、科学が決して確実性を持つものではないことを意味しているのである。

さらに、本書の中で科学の確実性について考えさせられるところがある。そこで、ユリウス・ワグナー・ヤウレグという学者に関する部分を分析する。彼は、本書の中では、主人公であるアンタールと元同僚のムルガンとの会話、および、ムルガンと、ムルガンがカルカタで出会ったインド人記者であるウルミラの会話の中に登場する学者である。ユリウス・ワグナー・ヤウレグは、梅毒を治療するためにマラリアを利用し、1927年にノーベル賞を受賞した実在した学者である。そんな彼に関するムルガンとウルミラの会話の中に、科学の確実性に疑問が投げかけられる面白い部分がある。ムルガンはウルミラに、次のように話している。

To this day no one really knows how the Wagner-Jauregg treatment worked. Not that anyone's losing any sleep over it. It was a scientific scandal and medicine was almost grateful to turn its back on it once antibiotics came along. Old Julius didn't worry too much about how it worked either. He was no biologist, remember: he was a clinician and a psychologist. He thought the process worked by raising the patient's body temperature. It didn't seem to bother him that no other fever had the same effect. (248)

現代ではあまり考えられないが、病気である梅毒を病気であるマラリアで治療するやり方は、当時ではごく一般的に行われていた。ここで面白い部分が、ユリウス・ワグナー・ヤウレグの治療法はどうして効果があったのか、また、なぜマラリア熱が梅毒の末期症状を抑えるのか、これらのことに関しては未だに謎のままであるということである。さらに、梅毒に対する抗生物質ができてからは、ワグナー法は気にも留められなくなったというムルガンとウルミラの会話がある。このことをよく考えてみたい。

医学は人の命に関わるため、どのようなことでも確実であり、信用できるものであって欲しいと人が願うのは、ごく当たり前なのではないだろうか。にもかかわらず、当時のユリ

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

ウス・ワグナー・ヤウレグの治療法は、どのように効くのかもわからないままに行われていたものであった。それは結果として効果はあったものの、その過程を考えると、時に科学は信用性の乏しいものであることを示唆しているのではないだろうか。また、その後ワグナー法は気にも留められなくなったということを考えると、科学の考えの中には一時的にしか受け入れられないものがあるという可能性があるのではないだろうか。このことに関しては、Chambersも“Postcolonial Science Fiction.”の中で、次のように述べている。なお、彼女の引用にある“**This**”は、私が上に記した*The Calcutta Chromosome*のムルガンの会話中の一部の引用文をさす。

This quotation indicates that science, medical science in particular, consists of many hypotheses or findings that are not fully proven or understood....This suggests that what one generation considers to be scientifically viable may be deemed deviant by the next. (67)

完璧に証明されているわけではないということは、科学にも不確かな部分はあるということをChambersは示唆しているのである。さらに、ある世代では受け入れられた治療法が、次の世代では受け入れられがたいものとなるということは、科学は不確実なものであるということも彼女は指摘している。科学は変化する分野であり、また、証明されたことは永遠に続くものではなく、再び研究され、変更がなされるものであることは明らかであろう。科学というものは一見「定義されたもの」であり、「非常に信用できる確かなもの」に思えるが、実際はそうではなく、「再定義が何度もなされるもの」であり、「不確かなもの」でもある。では、その科学に変更が加わるのはどういった時で、また、どういったものが変化を与えるのだろうか。

多くの人は、科学は西洋のものであるというイメージを抱いている。西洋の科学者たちによって証明され、定義された科学が、西洋の周辺の国々である、いわゆる発展途上国に流れるというように、多くの人は考えるだろう。しかし、先進国で作られたものがそのまま、いわゆる発展途上国などの国に一方的に流れるというのは、実際に本当のことなのだろうか。今回の作品で考えるとインドがいわゆる発展途上国にあたる。そして、ロナルド・ロスというイギリスで科学の教育を受けた学者が単にインドという地に科学を持ち込むというように、一見考えられる。

しかし、実際はこの物語でも語られるように、確かにロナルド・ロスは、科学の教育をイギリスで受けてはいるが、科学研究、つまりマラリアの研究をインドのカルカッタで行っ

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

ているのである。単に科学が西洋から持ち込まれるのだとすれば、どうして、この作品の中で書かれている通りインドのカルカッタでマラリア研究が行われているのだろうか。それは、科学は先進国で研究が進められて、先進国で定義され、他の多くの国にそのまま一方的に流れ込む、というようには決して進まないことを表しているのではないかと私は考える。つまり科学は、決して先進国の中だけで進められるものではなく、西洋の周辺国—本書で考えるとインド—との交わりの中で変化するのであり、国と国の交わる環境で大きな影響を受けているということを表しているのではないだろうか。この点に関しては、Chambersも“Postcolonial Science Fiction.”の中でArnoldの論文を引用し、次のように述べている。

[s]cience knowledge and the ideology of science... can be “actively redefined in the milieu of a recipient culture.” The receiving society, far from being, supine, “subverts, contaminates, and reorganises the ideology of society as introduced by Europe.” (64)

科学の知識や概念は、ある文化や環境の中で再定義され得るものであるとChambersも述べている。この環境とは、本書の中ではインドのまさにカルカッタである。科学が単に、イギリスの学者であるロナルド・ロスから一方的に導入されるのではなく、カルカッタという地で組み替えられ再定義されるのである。確かに小説の設定ではあるが、物語の中でも科学の再定義が考えられる部分がある。ロナルド・ロスはパトリック・マンソンという学者の指示を受け、研究を続けている。しかし、マンソンが出した指示は非常に遠まわしで、マラリアの感染ルートの発見には程遠いものである。そこで登場するのが、ラッチマン（ラアカン）という現地のインド人である。ラッチマンはロナルド・ロスが研究していた数年間、片時も離れずロナルド・ロスをマラリア感染ルートの発見まで導いている。

ここでマラリアの感染ルートの発見に、ラッチマン（ラアカン）というインドの人物が関与している点を考えると、科学のとらえ方の再定義が必要なのではないだろうか。確かに科学は始めは西洋から持ち込まれるものではある。この作品では、ロナルド・ロスが、つまりイギリスの学者が持ち込んでいる。しかし、西洋から持ち込まれてそのままひろがるわけではない。科学は持ち込まれた後で、ラッチマンのようなインド人であったり、インドのカルカッタという環境が関与することを通して、大きな変化を受けているのではないだろうか。実際にどのような影響を与えているのかは後ほど分析する。あくまで小説の設定ではあるが、と前述したが、実際にロナルド・ロスは、マラリアの感染ルートの発見において、カルカッタの研究所にいる助手やカルカッタにいる現地の人の力を多く借りてい

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

る。もりによると、ロナルド・ロスは「手あたりしだいに蚊をとらえ、マラリアにかかっている現地人のベッドの上をおおっている蚊帳の中にそれを放った。こうしてマラリア患者の血を吸った蚊をとらえてびんにつめ、毎日それを殺してその胃をのぞいた」(120) そうである。つまり、小説の中だけではなく、実際にもマラリアの感染ルート発見の裏には、ロナルド・ロス一人の力だけではなく、カルカッタという地や文化や環境、また、そこに住む人々が大きく関与していると考えられる。科学でいう発見—今回の話で考えるとマラリアの感染ルートの発見—は、西洋文化の中だけでは決して起こらないものであり、カルカッタという西洋以外の国、つまり、実際にマラリアが蔓延している国で起こるのである。とすれば、やはり他の国の文化と交錯し合う環境が科学に変化を与えるのである。

明らかに、ゴーシュは科学を題材にしながら *The Calcutta Chromosome* を書いている。では、物語の中でその科学はどのように扱われているのだろうか。私は、この小テーマは、ゴーシュがなぜ科学を題材にしてこの作品を書いたのかを考えるのに役立つと考える。

序章でも述べたが、科学の要素の中には「知ること」であったり、「知ろうとすること」があると私は考える。科学は研究を繰り返し、裏づけや証拠を捜し求めるからである。それは同時に、今までわからなかったことをわかろうとする作業でもある。物語の中でムルガンも “The mid-nineteenth century was when the scientific community began to wake up to malaria. Remember this was the century when old Mother Europe was settling all the Last Unknowns”

(56) と述べている。ヨーロッパの国々の学者が最後の謎に決着をつけるとあるが、まさにこれが科学の行うことであろう。つまり、科学は、今までわからなかった多くのことをわかろうとし、多くの謎を解こうとすることでもある。そう考えると科学は、多くのことを知ろうとする点で、まさに植民地化と類似性があると言えるのではないだろうか。ここで私は植民地化と科学に見られる共通点は二つあると考える。一つは、「対象となるものを知る」ということであり、もう一つは、西洋側から周辺の地域へ展開すると一見考えられることである。植民地化する過程で必ず必要になるのは、相手の国を知ることである。科学に必要なことも、もちろん、研究対象を知ることである。そして、科学と植民地化と聞いて思いつくのが、ヨーロッパのような先進国ではないだろうか。実際のところ、ロナルド・ロスの自伝には植民地化に関わる言葉が多く見られる。

I am sure that none of them [his rival scientists] would ever have embarked on so vast and stormy a sea, would ever have been the Columbus of so wild adventure, ... but the madness required to find that uncharted treasure island!

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

Really they have forgotten what was their true vocation to stay at home and draw the maps after the event, to colour them red, blue, and yellow, to put their own names to the continents and islands, and to draw their salaries - a much more pleasant occupation. (qtd.in Chambers.63)

ロナルド・ロス は、科学の中に見られる発見やその発見に至る過程を、冒険や植民地に乗り出すことに例えており、Chambersも“Postcolonial Science Fiction”の中で、ロナルド・ロスの自伝において科学の発見と植民地化が同一視されていることに目を向けている(63)。 *The Calcutta Chromosome*の中で、科学への挑戦が描かれているのではないかと私は述べたが、この類似点を考えると、この物語は植民地化への挑戦も描かれているのではないだろうか。

ここで、登場人物であるムルガンの言葉を考えてみたい。彼は、ロナルド・ロスがマラリアの感染ルートの発見の裏で、マンガラたちに上手く利用されていたという推測を立て、“What gets me about this scenario is joke. Here's Ronnie, right? He thinks he's doing experiments on the malaria parasite. And all the time it's him who is the experiment on the malaria parasite. But Ronnie never gets it; not to the end of his life.”(79)と述べている。ここで面白いことは、実のところ実験を行いマラリア感染ルートを発見したロナルド・ロスが主役であるはずなのだが、物語の中では、彼が実験の中でマンガラたちに操られていて、主役ではないということである。こういった物語の構成の中にも、ロナルド・ロスのような科学の立場の人物とマンガラたちのような「反科学」の立場の人物の逆転劇が描かれている。

ゴーシュは、この物語の中で、「反科学」という言葉を多用するのだが、彼は、一見、迷信めいたものを科学と同等の立場で描いている。また、彼は多くの場面で、科学をカルカッタの文化や環境、そこにいる人々と関連づけて、「反科学」的な要素、SF的な要素を交えて描いている。では、ゴーシュはなぜ、迷信のようなものを科学と同等に扱いながら、「反科学」として作品の中で強調して書いたのだろうか。次の二章では、その「反科学」の場面を分析していく。

第二章 「反科学」

The Calcutta

*Chromosome*で、物語全体の面白さを引き立てているのは、間違いなく科学に対する挑戦として書かれている「反科学」であろう。では、反科学の話は、物語全体にどのような影響を与えているのだろうか。私は、反科学は科学の考え方に対する挑戦であり、科学に違った見方を提供していると考えている。科学では理解できないことが反科学の内容とも言えるだろう。反科学が主に展開されるのは三つの場面である。一つ目の「フルボニの体験」の場面では、不可解な出来事の中で反科学側の人間が科学側の人間を殺そうとすることが語られている。二つ目の「カルカッタ染色体」の場面では、科学がいかに西洋だけでなくインドの文化とも関わりがあるかが描かれている。三つ目の「クロフネ・ポングラツツの降霊会の記録」の場面では、科学が宗教的な見方を通して語られている。反科学と言っても、各場面ごとに科学に対する挑戦がなされているが、それは全て違ったアプローチの仕方である。そこで、具体的にこの三箇所の場面を分析していく。

まず、「フルボニの体験」の場面を分析していきたい。「フルボニの体験」とは、*The Calcutta*

*Chromosome*に登場するフルボニという作家が、1933年にレヌプールという駅で体験した奇怪な出来事に関することである。この当時、フルボニはパーマー・ブラザーズという会社に勤務しており、担当する地域を回っていた時に、このレヌプール駅で恐ろしい体験をした。そこでの体験をまとめる。フルボニはレヌプール駅に着くと、そこに現れた駅長の助言を無視して、駅にある信号小屋に泊まる。夜中にドアの隙間から入る雨に起こされたフルボニは、不思議と独りで動くランタンを見つけ追いかけた。駅長がランタンを持って歩いていると思ったフルボニは追いかけて続けているうちに、突然、列車のレールにつまづき、レールの上に倒れた。その直後にレールが震え、ラアカンという言葉と列車の轟き音が走り、フルボニは列車に轢かれかけたが、一命を取り留めた。彼は、翌朝の出発の時、やってきた列車の車掌から次のような話を聞いた。レヌプール駅には30年以上も駅長はいない。また、フルボニが泊まった信号部屋はかつて、手に障害を持ったラアカンという少年がおり、彼は行く当ても無く、その信号部屋で寝起きしていた。レヌプール駅に駅長が見つかった時、駅長は典型的な上級カーストの男で、ラアカンを非常に嫌い、ののしった。その後しばらくして、駅長はポイントを切り替えてラアカンを殺そうとしたが、ラアカンの方が駅には詳しく、転んで列車に轢かれたのは駅長だったのだ。この話を分析していきたい。

この「フルボニの体験」の場面が反科学的であり、科学への挑戦であると述べたが、どの

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

部分が科学への挑戦になるのだろうか。それは、ラアカンが鉄道を上手く利用した部分、さらにこの場面が不可解なものであることだと私は考える。鉄道も科学により発明されたものであるが、ここで注目したいことは、ラアカンという少年は、後にも述べるが、反科学側の人間でありインド人であること、さらにその彼が、列車を上手く使いフルボニを殺そうとしたり、上級カーストの男を殺したことである。西洋からインドへ持ち込まれた科学により発展した鉄道が、単に西欧の人間に利用されているのではなく、反対にそこにいるインド人に利用されていて、インド人の間の闘いの道具として使われている。フルボニは、インド人ではあるがイギリスの会社に勤める人間であり、言わば西洋の側の人間としても考えられる。その彼が、現地の人間であり反科学側にいるラアカンに殺されかけている。西洋の科学から生まれた鉄道が、インド人の手によって上手く利用され、西洋側の人間が殺されかけた部分を考えると、インドと西洋の権力構造が逆転されているように私は感じる。このことに関して、Romanikは次のように述べている。

Along with their use of science for imperial objectives, the colonizers infiltrated and dominated the technologies of movement, although Indian and diasporic characters also learned to use the imperial networks of railroads, communication, and public health for their own ends. To take advantage of the colonizer's technology, Laakhan learns to use the railway signal lantern and railtrack switches. His use of the railways can be understood as one individual's attempt to redefine the structures of authority and the technologies of the colonizer through everyday practice. In *The Practice of Everyday Life*, Michel de Certeau advances the theory that individuals, even colonized individuals, can subvert and use rituals, laws, and other social institutions and structures 'not by rejecting or altering them, but by using them with respect to ends and references foreign to the system they had no choice but to accept.' (45)

植民者たちは、科学をインドに浸透させるが、同時に、インド人もその科学、つまり鉄道やコミュニケーションネットワークを利用し、権力構造を再定義するとRomanikは主張している。インド人であるラアカンが鉄道を利用し、同じインド人ではあるが西洋側にいるフルボニを轢き殺そうとした。ゴーシュはこの場面で、西洋とインドの権力構造に対する新しい見方を表現したのではないだろうか。ラアカンは鉄道を変化させておらず、ただ鉄道を利用しただけに感じるが、この裏には反科学側の人間が鉄道を利用し、西洋の権力構造への新しい見方を提供しようとしたことが読み取れる。科学はインドに多くのものをもたらしたが、同時にインドの人々に利用されている。このように考えると、その地に住む

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

人々によって科学は使われ方が変わるわけであり、この場面は科学の見方に変化をもたらす前兆にもなるのではないだろうか。つまり科学は、ただイギリスやヨーロッパなどの西洋諸国からもたらされるものではなく、インドなどのもたらされた国において使われ方が変化し、科学に対する見方に変化が起こることを示唆しているのではないだろうか。ゴーシュは、西洋に対してこういった権力構造への変更の変化を描くことで西洋への挑戦をしており、また科学に対する見方の変化を描くことで、科学への挑戦を行っているのである。こういった場面には、科学に対する解釈の変化や西洋への挑戦という要素があり、これには、文化間の交わりが関係していると考えられる。このことに関しては前章でも少し触れたが、非常に大切な部分となるため、後ほど分析する。

さらに、「フルボニの体験」の場面において、科学的な考え方や西洋的な考え方にメスを入れるような言葉がある。それは、フルボニがラアカンの話を聞いた直後に、車掌から言われた言葉である。フルボニが、ラアカンの話をなぜ前もって教えてくれなかったのか、と車掌に聞いたところ、次のような返事が返ってきた。

But you would not have believed me. You would have laughed and said, 'These villagers, their heads are full of fantasies and superstitions.' Everyone knows that for city men like you such warnings always have the opposite effect. (281)

おそらくフルボニは、インドの小さな村人の頭は妄想や迷信でいっぱいだと笑って言い、話を聞かないだろうと、車掌は思ったのである。反科学の内容は一見すると、妄想や迷信のようなものであり、説明できない非科学的な考え方であり、西洋の考えとは全く反対のものである。一方、西洋の考えは、とりわけ証拠に基づいた科学的な考えを持ち、論理的な思考を持つものである。しかし、物語の中でゴーシュは、反科学を迷信的な存在としては描かず、科学の反対に位置する存在として描いている。物語の中でフルボニが体験したことは、怪奇的な説明のつかない出来事であり、その出来事を単なる迷信としてではなく科学に対抗するものとして描くことで、ゴーシュは科学的な考え方にメスを入れているのではないだろうか。つまり、科学的な考え方だけでは説明がつかないことは世の中に多くあり、科学的な考え方だけに固執する、つまり西洋の考え方だけを持つことには危険があることを示唆している場面なのではないだろうか、と私は考える。

さらにこの「フルボニの体験」の前に同じような場面がある。それは「J・W・D・グリッグソンの体験」の場面である。グリッグソンは物語に現れるインド言語調査局なる組織の職員であり、ケンブリッジ大学を卒業したイギリス人である。彼は1895年にロナルド

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

・ロスのバンガローに現われ、そこにいたラアカンに興味を示し、彼の話す言葉から、彼がどこの生まれの人間であるかを調査し始めた。しかし、彼もこの後、ラアカンを細かく知ろうとしたあまり列車に轢き殺されかけたのである。この「J・W・D・グリッグソンの体験」の場面と「フルボニの体験」の場面の関連性は、科学側にいる人間が反科学側にいる人間に殺されかけたこと、さらに場面の描かれ方が怪奇的なことである。反科学の科学への挑戦ということ踏まえ、この二つの場面は、反科学が科学に匹敵するような存在であることを意味している場面であると私は考える。さらに、インドには科学的思考ではわからないことがあること、西洋的な考え方で物事を理解したり認識することにはとても危険が生じることをこの二つの場面は訴えかけているのではないだろうか。

ゴーシュは「フルボニの体験」の場面を、非常に怪奇的なものとして描いている。しかし、彼はこの怪奇な場面を迷信として扱わず、科学に対立するものとして描いている。それはどうしてなのだろうか。次の「カルカッタ染色体」の場面で明らかにしていきたい。

では、反科学の内容として原作の題名にもなっている、ムルガンが名付けた「カルカッタ染色体」を分析したい。「カルカッタ染色体」とは、もちろん実在しないものであり、原作の中でムルガンが造った言葉である。また「カルカッタ染色体」は、謎の集団であるマンガラやラッチマンたちが行っていた研究内容の中身であり、人格を染色体レベルでコントロールし、最終的には不死を目指すというものである。

ここで一つ考えたいことは、ゴーシュはどのようにして「カルカッタ染色体」を研究する謎の集団という設定を用いて、*The Calcutta Chromosome*を書いたのかということである。「カルカッタ染色体」は明らかに実在しない、架空の染色体であり、物語の中でしか存在しない造語でもある。謎の集団たちは、ロナルド・ロスを裏で操りながら、この「カルカッタ染色体」を中心とした不死の研究を進めている。「カルカッタ染色体」の場面設定の中では、このように反科学側の人間たちが、科学側の人間たちを巻き込んでいくような構造になっている。ロナルド・ロスがマンガラたちに操作されている部分もこの構造の一つであり、これも科学への挑戦と読み取ることができる。

ここで、「カルカッタ染色体」の考察を進めるために、謎の集団がロナルド・ロスにマリアの感染ルートを発見させたという部分をもう一度考えてみたい。ロナルド・ロスの発見にはラッチマン（ラアカン）が関与しており、これが科学そのものに影響を与えていることを示唆していると前章で私は述べたが、ここで考えられる影響とは、科学は必ずしも

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

ヨーロッパのような西洋諸国から持ち込まれ、そのまま発展するものではないということである。このことに関してはMondalも次のように述べている。

This in turn reverses the direction of scientific knowledge and challenges the 'diffusionist' narrative of scientific discovery whereby knowledge travels out from the Western center to the non-Western periphery. (55)

引用の“**This**”とは、ロナルド・ロスがマラリアの研究を進める一方で、本当はマンガラたちに操作される側の立場にいたという小説の設定全体を指す。科学への挑戦と私は述べているが、具体的にそれは何を意味するのか。ここでゴーシュは、科学の知識の方向性に着目している。つまり、ゴーシュは、科学が西洋から西洋周辺へと単に流れ込むという一般的な考えを崩そうとしているのである。前章でも少し触れたが、科学は西欧から単に持ち込まれるものではない。その国々の中で、また、西洋とそれが持ち込まれた国—物語の中ではインド—との間の中で科学への見方が変化している。確かに、初めに科学をインドへ持ち込んだのは西洋である。しかし、科学は絶対的なものではないのである。ある一つの文化の中で独自に進められるものではなく、インドと西洋という、文化と文化の交わりの中で科学への解釈は変化していき、それが今度は反対に西洋へと影響を与えるのである。このことは「フルボニの体験」の部分でも少し触れたが、文化間の交わりに関しては、Chambersも“Postcolonial Science Fiction”の中で、次のように述べている。

According to Murugan, its members manipulated Ross's discovery to enable their own much more advanced breakthrough, the secret of immortality through literal reincarnation into a new body. This allows Ghosh to make the important point that science, technology and medicine were not conveyed to India by the British in a one-way process of transfer, but were in fact involved in a complex series of cross-cultural exchanges, translations and mutations. (58)

科学というと、やはり西洋のものであるというイメージがあるが、ゴーシュはこのイメージを崩そうとし、挑戦を行っているのである。科学はイギリスからインドに対して一方通行で進むものではなく、文化間の交流があってこそのものであるとChambersも述べているが、「カルカッタ染色体」というものはまさにこのことを示唆しているのだろう。ムルガンによると、ラッチマン（ラアカン）は、インドでカニンガムという学者の助手になりすまし、自らの研究—マラリアを用いて不死を目指す研究—を進める一方で、ロナルド・ロスが、マラリア感染ルートを発見することを裏で操作していた。ここには、インドの人

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

々がこのイギリス人学者を利用して、不死を実現させるという物語の設定がある。これは、西洋医学の知識をほとんど持たないインド側の人間たちが、西洋側の人間を利用していることを意味する。この場面は、科学が必ずしも西洋のものではないこと、科学は西洋側からその他の国へ一方的に流れ込むものではないことを提示しているのではないだろうか。

確かに、科学は西洋から持ち込まれたものであるが、以上のように、ゴーシュは科学の方向性に着目して挑戦を行っている。確かに、「フルボニの体験」の場面同様、「カルカタ染色体」の場面も一見すると怪奇的なものであるが、ゴーシュはこれらの場面を通して、インドにおける科学を描こうしたのではないだろうか。さらに、ゴーシュが、インドにおける科学を描く場面がある。それは、クロフネ・ポングラッツという人物の記録にある降霊会の場面である。ここでは、ゴーシュはインドにおける科学をどのように描き、どのように科学への挑戦を行っているのだろうか。

まずは、場面の説明を行いたい。クロフネ・ポングラッツは、マダム・サルミネンというスピリチュアリスト教会という組織を持つ人物の一番弟子である。物語の中では、1898年に、マダム・サルミネンを囲む降霊会があり、そこにC・C・ダンという人物が現れたことがクロフネ・ポングラッツの記録に残っており、その記録についてムルガンが語っている場面がある。実は、このC・C・ダンとは、カルカタに研究所を持っていた科学者のD・D・カニンガムのことである。科学者である彼が、降霊会に現れ、降霊の途中で“Save me ...from her ... pursuit ...beg mercy...”

(p212)と述べている。“her”とは、物語の中で何度も語られる「沈黙」のことなのだが、「沈黙」に関しては「知」にも関係があることなので、後の三章で考える。この場面は、科学者であるカニンガムが降霊会に現れて、「沈黙」から自分を救って欲しいと助けを求めている場面である。

この何かから助けを求める場面を読んだ私は、この場面は非常に宗教性の強い内容だと感じた。というのも、何かに祈りを捧げ、助けを乞う行為が、宗教にも多くあるためである。科学の分野にいる科学者が宗教のようなものにすぎる場面を描くことで、科学と宗教の境界線が薄くなり、実はそこには境が存在しないことを、この場面は提示しているのではないかと私は考える。

ここでもう少し、ラッチマン（ラアカン）やマンガラたちが率いる謎の集団のことを考えたい。ムルガンは、彼らは「沈黙」を信仰している集団であると物語の中で述べている。

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

この謎の集団は、何か具体的な証拠を持って研究を進めるといった科学的な方法は用いない。彼らが行っている研究には証拠などはなく、彼らは、直接的なコミュニケーションも取らず、「秘密」や「沈黙」を信仰しながら研究を進める集団であり、それは研究というよりも宗教に近いものである。物語の中にあるカニンガムの研究所において、何人かの梅毒患者たちが、ハトを持ったマンガラの前にひれ伏している場面のことを考えても、研究というよりも宗教に近いものを感じる。

私が考えるのは、「カルカッタ染色体」の場面や、「クロフネ・ポングラッツの降霊会の記録」の場面は、科学は科学の分野だけで考えられるものではなく、その他の分野とも関連があり、科学だけを切り離して考えることはできないことを示唆しているのではないだろうか、ということである。特にこの物語では、科学は科学だけで考えられるものではなく、宗教の分野とも切り離せないことを示唆しているのではないだろうか。*The Calcutta Chromosome*における宗教と科学との関係は、Chambersも“Postcolonial Science Fiction.”の中で、Arnoldの論文に言及しながら以下のように述べている、

The “science” of the mysterious Indian cult incorporates religious ritual, sacrifice and reincarnation into more straightforward scientific practices. Ghosh uses Mangala, Lutchman and the counter-science group to suggest that a radical alternative to the hegemony of Western scientific knowledge is possible. The implication is that this challenge will only be made if the knowledge and beliefs of third-world countries, such as India, are fused with scientific concepts from the West. Ghosh here draws upon the work of recent historians of science who suggest that Western science was and is being reinterpreted and remade in India, when Indian scientific enthusiasts splice their own cultural assumptions with Western scientific tenets. David Arnold indicates that the supposedly rigid borders between religious “tradition” and scientific “modernity” were in fact porous for many middle-class Indians who began to turn to western science from the late eighteenth century onwards. (64)

18世紀後半から、西洋科学へ目を向けていた多くのインド人の中流階級者たちにとっては、「宗教」の「伝統」と「科学」の「近代性」の間にある境界線は多孔的であったとChambersは述べている。多孔的であるということは、科学と宗教、また近代性と伝統というものが、完全に分離したものではないということである。このことを考えると、インドにおける宗教と西洋における科学との間にある境界線が薄くなることで、科学的な考えと宗

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

教的な考えが交錯し、前述した「カルカッタ染色体」のような考え方が生まれたのではないだろうか。不死を目指す「カルカッタ染色体」と「クロフネ・ポングラッツの降霊会の記録」の場面は、怪奇的でありながらインドにおける科学を表現し、既存の西洋の科学的な知を揺らがせ、科学に対する新しい見方を提示していると私は考える。このことに関しては後の三章で考察することにする。

以上のように、この物語は、現代の科学への挑戦であると同時に、科学をその領域だけで解釈することは不可能であり、その他の分野とも関わりがあることを教えてくれている。つまり、科学を考える際には、科学がもたらされた地に住む人々や文化を同時に解釈していかなければならないのである。多くの場面を考え、反科学というものは、科学への挑戦であると私は述べた。科学は西洋のものではないこと、文化の交わりが科学に影響を与えること、科学と宗教の関係性に焦点を当て、違った角度から科学にアプローチすること、こういったことを通して今までの科学への解釈を、ゴーシュは変えようとしていることは、今まで述べてきた通りである。では、この科学に見られる「知」と反科学に見られる「知」を、ゴーシュはこの作品の中でどのように扱っているのか、またゴーシュはこの二つの「知」を使って作品を書くことで、読者に何を伝えようとしたのだろうか、次の三章で考えていく。

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

第三章 「科学」と「反科学」、そして新しい「知」

一章、二章で見たように、*The Calcutta*

*Chromosome*では、科学と反科学の関係が書かれている。私が物語を読んで最も興味深く感じたことの一つは、この科学と反科学の考えを土台にしながら、ゴーシュが「知」の問題にまで触れている点である。この三章では、科学的「知」の限界、また科学と反科学の二つの「知」を比較しながら、ゴーシュがどうしてこの作品を書いたのか、その理由を自分なりに考え、まとめていく。とりわけゴーシュは、ポストコロニアルな作家であるだけに、「知」の問題をどのように解釈しているのか。また、彼はこの作品を書くことで、読者に何を伝えようとしたのだろうか。

The Calcutta

*Chromosome*にあるムルガンの会話の中に、知に関することが書かれている。「知」に関してのムルガンの会話は非常に興味深いものであり、ゴーシュの主張を代弁しているように考えられる。ムルガンは物語の中で、ロナルド・ロスのマラリアの感染ルート発見の裏には、謎の集団が関与しているという推理を立てた。ムルガンによると、その謎の集団は不死を目指す研究をしていて、主に反科学なるものを信仰している。反科学は、二章で見たように、科学の反対を意味するものであり、科学のような証拠や裏づけといったものは、反科学を信仰する謎の集団には無い。また、この集団は主に「沈黙」を用いるが、直接的な意思疎通を図る「言語」は用いない。物語の中でムルガンがこういった話を主人公であるアンタールに告げている場面がある。

Maybe this other team started with the idea that knowledge is self-contradictory: maybe they believed that to know something is to change it, therefore in knowing something, you've already changed what you think you know so you don't really know it at all: you only know its history. Maybe they thought that knowledge couldn't begin without acknowledging the impossibility of knowledge. (105)

ムルガンは、「知識というのは知ることの不可能性を認めて初めて可能である」と述べている。この考えは反科学の核となるものでもある。一方で、科学は反科学とは違い、証拠や裏づけを見つけ、説明可能なことや合理性を追求し、「沈黙」ではなく「言語」に依存する。というのも「何かを知る」、または、「何かを知っている」と主張するためには、口に出したり、書き綴ったり、「言語」に依存せざるを得ないからである。科学的な「知」とはまさにこれにあたる。物語全体やムルガンの主張によると、科学的な「知」は「知

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

ること」を求め、反科学的な「知」は「知ることの不可能性」を認めている。反科学側の考えによると、何かを「知ること」は完全には不可能であり、知ることには限界がある。「知る」と主張するためには、「言語」に頼らなければならないため、この「言語」というものには「知」、つまり「知ること」を歪める要素があると考えられる。これは、ムルガンの主張から借りるとすれば「何かを知ろうとするとその知ろうとした対象は変化するために、結局は知らないことになる」という意味でもある。これはどういうことなのだろうか。このことについて、Chambersは“*Networks of Stories*”の中で次のように述べている。

Throughout his writing, Ghosh is preoccupied with the notion that language is not a neutral reflection of reality, but in fact irrevocably shapes our view of reality. Perhaps for this reason the counter-scientific group rejects language, choosing to work instead with silence and indirect communication. (54-55)

ゴーシュにとって、「言語」は、現実をそのまま描写するのではなく、現実の見方を規定するものであるとChambersは述べている。これは、「言語」により、現実のありのままを理解するのではなく、「言語」が現実の認識を形づくるという意味ではないだろうか。この考え方に従えば、「言語」は物事の真理を歪めるようなもので、現実の物事を理解することへの限界が言語自体に内在するということになる。私たちはある対象を知ろうとする過程で「言語」を使用するため、そこにはある解釈が入ってしまい、その対象を本当の意味で知ることはできないのではないだろうか。

このように考えると、「言語」というものは、物事を知ろうとする上で、「障害」ともなりうるものである。Chambersは、「言語」に関して“*Networks of Stories*”の中で、次のようにも述べている。

Here, the Word appears as a permanent obstruction to clear understanding. Phulboni intimates that language severely restricts our vision of life, filtering out images that it cannot interpret, like a veil covering the eyes. (55)

ここで、「言語」は物事をはっきりと理解することに対して障害になるものであるとChambersも述べている。これは、物語でもフルボニが演説の中で“indeed the Word is to this silence what the shadow is to the foreshadowed, what the veil is to the eyes, what the mind is to truth, what language is to life”

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

(p29)と述べていることであり、「言語」は真実を隠し、目を覆う「ベール」でもある。真実を知ろうとする中で、「言語」を使用すると、その「言語」が規定するようにしか現実を認識できないため、知ることに限界が生じるのである。「言語」といった直接的なコミュニケーションの手段を用いて、何かを知ろうとすることは、科学の「知」の中核であり、同時にそれは西洋の「知」の特徴でもある。「言語」が真実性を歪めるというこの問題点を考えると、「言語」に限界があるのと同時に、西洋の「知」、つまり、科学の「知」にも限界があると考えられる。このように、科学の「知」について考えてみたが、*The Calcutta*

*Chromosome*は、主に科学と反科学の関係が中心に描かれているため、反科学にも焦点を当てて考えてみたい。そこで私は、科学の「知」と関係して、反科学側が行った「沈黙」について考えていく。まず反科学側の考えをムルガンの主張を中心に振り返る。

ムルガンの主張によると、反科学側の立場は「知ることの不可能性を認めることで知識は成り立つ」ということである。だからこそ、反科学側は、知ろうとすることに必要な、直接的な方法である「言語」を使わず、「沈黙」を選んだのである。「沈黙」は反科学の立場にある謎の集団であるマンガラたちが信仰するもので、直接的なコミュニケーションの手段ではなく、「言語」とは対立するものである。さらに「言語」とは違い、直接的な意思疎通を図るものでもないため、真実を歪めることもない。この「沈黙」が反科学の支えとなるのである。「沈黙」に関して、VescoviとのインタビューでGhoshは次のように述べている。

The colonialist was always seeking to know, to know exactly what forces were in control, and we see now that this process has become universalized. So when I look back to movements of resistance to colonialism one thing which always strikes me as so interesting is that they are always silent; they never declare their programme, they never declare their agenda. If you look at 1857, at the Indian Mutiny, it is very hard at any point to find a sort of programme where they say this is what we want. Or if you look at, say, al-Qaeda on 9/11: to this day we don't know what those people wanted. So it often actually happens that if you think of the progress of modernity it is the progress of continuous cataloguing, of a continuous search for exhaustive knowledge. One of the ways people have historically resisted that is through silence. (133)

多くの国を植民地化しようとする西洋諸国は、植民地化の対象となる国をまずは知ろう

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

とすることから始める。このことは、私が一章で述べたことでもある。このことに対して、植民地化される側の国は抵抗する。この抵抗の象徴こそがまさに、「沈黙」である。面白いことに、ゴーシュは、この西洋の「知」への抵抗である「沈黙」という行為を、*The Calcutta*

*Chromosome*の中で、マンガラやラッチマンたちの反科学集団の信仰として描き、「沈黙」についての自分なりの考えをまとめている。「沈黙」は西洋の「知」—科学の「知」—にはないものであり、インドなどの植民地化される国に見られる抵抗のひとつであり、反科学に必要なものである。また、前章でも私は述べたが、物語の中でフルボニという小説家が、レヌプール駅での奇怪な体験をした後に、演説を通してこの「沈黙」を強く求めている場面がある。彼は演説の中で何度も「沈黙」を強く求めているのだが、結局はそこまでたどり着くことができていない。これは、西洋や科学の「知」に固執した人には、決して「沈黙」といった反科学の考えを完全には理解できないことを示唆していると私は考える。フルボニは「沈黙」を求め、それを知り、得ようとしている。しかし、知ることへの抵抗が「沈黙」であるのだから、知ることができないのである。

さらに私は、ゴーシュが「沈黙」を掲げる反科学の考えを「知」の一つであると考えていることに興味を持った。このことに関しては、再びVescoviとGhoshのインタビューが参考になる。

There can certainly be a wisdom without structured knowledge. I think people can achieve deep insights through other forms of knowing, through forms of knowing that we wouldn't even recognizing. And I think in fact the novel is one of those forms of knowing. But I don't think I would call it ignorance exactly, I would say that's a different way of knowing, of exploring possibilities, of exploring Truth. (133-134)

ゴーシュは、反科学の集団が研究していた「カルカッタ染色体」や、彼らの研究のやり方は決して無知でばかげたものではないと述べている。さらにゴーシュは、彼らの考え方は、私たちが理解できない、違った「知」であるとも述べている。物語の中では、二種類の「知」があると私は序章で述べたが、それはいわゆる科学の「知」と反科学の「知」というものであり、ゴーシュ自身もこの二つの「知」の存在を認めている。では、科学の「知」というものの限界や、反科学が提示している別の「知」のあり方というものを作品で扱うことで、ゴーシュは読者に何を伝えようとしているのだろうか。

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

物語全体を通して、ゴーシュが西洋科学への挑戦を描いていることは間違いない。ゴーシュは、科学の「知」では理解できないことが世の中には多く存在することを、反科学の集団による「カルカッタ染色体」の研究のシーンや、フルボニの奇怪な体験のシーンではっきりと述べている。前章でも述べたが、科学と宗教といったものを融合させることで、西洋の科学への挑戦を描いていることも間違いないことだろう。Chambersも“*Networks of Stories*”の中で次のように述べている。

Ross's verbosity and eagerness to read everything for posterity is contrasted with the mysterious silence of the counter-scientific cult. The feverish determination of the former to make his name in the annals of Western science is satirically contrasted with the Indian group's more metaphysical goals. Laakhan's and Mangala's apocalyptic fusion of science with religion implies an almost complete refutation of Western rationality and the notion that man is the “measure of all things” (57).

ゴーシュは、物語の中で、ロナルド・ロスの「言葉」の多さと反科学の集団の「沈黙」を対比させることで、西欧の合理性といったものを否定しているとChambersは述べている。この「言葉」と「沈黙」の対比のように、物語の中では、科学と反科学における様々な対立が描かれている。「知」への解釈も同じで、ロナルド・ロスのような科学側の人間は何事も知っていこうとする姿勢を持つ。一方でムルガンによると、謎の集団のような反科学側の人間は、「知」には不可能性が存在するという姿勢を持っている。このロナルド・ロスと謎の集団の考え方の違いも一つの対比である。「知」の不可能性に気づいたという反科学側のこうした主張や、これらの様々な対比は、科学の「知」への挑戦において、大きな鍵となると私は考える。

科学と反科学の「知」のこういった違いから、私は「知」というものは一つの解釈におさまるものではなく、様々な解釈がなされるものであると考える。これは、「知」への見方は決まって一つではなく、変化するものであるという意味でもある。ゴーシュの一番の主張は、「知」の見方の変化というものは、西洋の中だけで起こるのではなく、その他の国との交わりの中—今回の物語の中ではインド—で起こるというものではないだろうか。もっと大きな意味で、ものごとの見方の変化というものは、決して西洋の側からだけで起こるものではなく、インドとの交わりの中や、さらに言えば、インドなどの西洋以外の国の側からも起こるのではないだろうか。

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

また、多くの場面で、反科学が科学を巻き込む場面が見られると私は前述した。例えば、ロナルド・ロスのマラリアの感染ルートの発見の裏では、マンガラたちが彼を操作していたという話であったり、フルボニが列車で轢き殺されそうになる話である。このように、事実に基づく科学と、一見迷信のように考えられる反科学といったものの立場が逆転しているように考えられるところがあるわけだが、最後の場面でもそういったことが考えられる。最後の場面では、アンタールの友人であるタラとマリアが、実は、ムルガンがカルカッタに出かけた時にも現れた、ウルミラとソナリであったことが明らかになる。この二人は言わば反科学側の人間であり、その二人が、AVAを利用している言わば科学側にいる人間であるアンタールを巻き込んでいくという終わり方になっている。この場面は、反科学が科学を巻き込むような構造になっているのだが、ここでゴーシュは、反科学を科学と同等に対立するものとして扱っており、そこには二つの「知」が存在することを示唆していると私は考える。

このように、物語の中の様々な場面で、科学と反科学が同等な立場にあるものとして描かれている。「知」に関してそのまま同じことが言えるのではないだろうか。一般的に、「知」というもの、「何かを知る」という過程には、多くの研究がなされている西洋側から、その周辺の諸国に流れていく構造が考えられる。しかし、物語の中では、西洋の周辺の諸国に位置するインドが「知」への見方の変化を促すという構造になっている。これは現実でもありうることだということを、ゴーシュは読者に伝えようとしたのではないだろうか。「知」への見方は変化するという点に関して、Chambersも“*Networks of Stories*”の中で次のように述べている。

Ghosh's image of network of stories interlaced with silence thus forms a powerful plea that knowledge be regarded as a dynamic process, rather than a fixed entity. It is not that Ghosh is opposed to knowledge, but that in this novel he indicates that all knowledge, whether concerning science, history, or geography, are in fact provisional, they are stories still being told, still mutating. Ghosh seems to suggest that it is only when one recognizes that scientific practice or any claim to knowledge are in fact processes akin to story-telling, that one can actually set off on the evolving course of knowledge. (58)

「知」は不確実なものであり、まだ変化し続けるものであるとChambersは述べているが、私はこの物語では、「知」が変化するだけでなく「知」への見方が変化すると考える。つまり、「知」への見方が西洋の人々とインドの人々とでは違い、インド人からなされる

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

新しい「知」への解釈が、物語の中では語られているのである。*The Calcutta Chromosome*では、「知」への解釈の変化というものが、まさにインドの中で起こり、インドの人たちによってもたらされている。特にこの物語の中では、変化の対象が科学である。インドという国やインドにいる人々、またインドの文化が、科学に対する見方を変化させているのである。つまり、様々な文化の中で科学に対する見方が変化し、西洋の科学というものではなくなっていくのである。こういったことが主に語られる場面は、二章で見た「カルカッタ染色体」の場面であり、これはいわゆる「インド科学」なるものを提示していると私は考える。これは、西洋とインドの文化間で生まれる今までにない科学であろう。

この「インド科学」は、ポストコロニアル文学でもよく言われる、「インド英語」や「カリブ海英語」のようなものではないかと私は考える。「英語」においても、今や「イギリス英語」以外のものが多く存在する。その国に応じて、発音や形が変化して、様々な英語が生まれている。今では「イギリス英語」が「英語」そのものを指すのではなく、「イギリス英語」が「英語」の中の一つに含まれている。つまり、国々に応じて「英語」に変化が起こり、様々な「英語」が生まれることで、「イギリス英語」の絶対性というものが揺らいでいるのである。

この「英語」と同じような変化が、科学においても起こっていることを*The Calcutta Chromosome*は教えてくれているのではないだろうか。様々な国の中で起こる影響が、「西洋科学」の絶対性を揺らがせ、科学に対する見方の変化を起こすのである。作品の中で、ゴーシュは、マンガラたちが展開する「インド科学」とロナルド・ロスの持ち込んだ「西洋科学」の関係から、「西洋科学」の絶対性を揺るがせ、科学に対する新しい考え方を提示しているのではないだろうか。彼は、科学の「知」と反科学の「知」を、同等の「知」として作品の中で扱いながら、前章で見た「カルカッタ染色体」の場面を中心に、さらに物語全体を通して、科学や「知」への見方は一つではないことを提示していると私は考える。つまり、「カルカッタ染色体」のような反科学である「インド科学」が生まれることで、「西洋科学」が相対化され、科学への見方が変わるのである。物語でゴーシュが描いているのは、インドで生まれた「新しい知への見方」「新しい科学への見方」である。これはまさに「科学」における「知」のパラダイムシフトをゴーシュは描いたのではないだろうか。

「知」への解釈というものは、科学的なものであってもそうでなくとも、これからさらに変化を余儀なくされていくだろう。決して、西洋だけの「知」への解釈が、絶対的なものであり、周りの国々に影響を与えていくのではない。インドにおける「知」への見方とい

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

うものがあるように、その国々における独自の「知」への解釈というものが存在している。この物語はインドが舞台であったわけだが、インド以外の様々な国による「知」への見方が生まれてくると私は考える。そして、この物語のような「知」への新しい解釈は、今後もさらに大切にしていかなければならないのではないだろうか。

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

終章

以上見てきた通り、*The Calcutta Chromosome*では、科学を大きなテーマとして扱いながら、「新しい科学」や「新しい知」への見方が語られている。この作品を読んだ私は、物語の中で何度も語られる「カルカッタ染色体」を単なるフィクショナルなものとして扱うことはせず、西洋にはない反科学的なものと考え、また、そこから考えられる「新しい科学や知への見方」に焦点を当てた。

そこで、一章では、ゴーシュが史実とSFを織り交ぜながら描いたシーンから、私は西洋科学がいかに絶対的なものでないかを分析した。次に二章では、その科学の不確実な側面から、作品の大きなテーマともなる反科学が、科学への挑戦を物語っており、いかに科学と同等に対立するものであるかを論じた。さらに最後の三章では、「知」への見方には変化が起こることを踏まえ、科学と反科学の「知」から見出すことができる「新しい知や科学への解釈」が存在することを考えた。今回の論文で私が感じたことは、既存のものには様々な解釈ができ、そこからは多くの考えが生まれるということである。

今回の作品は、私が個人的に好きなSFとポストコロニアルな要素が織り交ぜられた非常に珍しい作品であり、この作品を題材に論文を書くことは容易では無かった。というのも、フィクショナルな部分とノンフィクショナルな部分を明確に分け、そこから「新しい知への解釈」を考えることが難しかったからである。私の残された課題は、自分自身も「新しい知への解釈」を行っていくことであろう。

私は、*The Calcutta*

*Chromosome*を読んで、様々なものの見方を考えること、あらゆる可能性が存在することを学んだ。そのため、この経験を活かし、今後はゴーシュの他の作品や、また他の作家の作品を、多角的な見方から読んで、多くの考え方に触れ、新しい可能性を見つけていきたい。なぜなら、ポストコロニアルな作品である *The Calcutta Chromosome* は、私の考え方の視野を広げてくれたためである。

ポストコロニアル文学は、日本ではまだあまり知られていないが、たくさんの方に読んで頂きたいものであり、ほとんどの作品から学ぶことが豊富にあると私は感じる。今後もポストコロニアルな小説が、世に広く普及することを願いながら、私も積極的に手にとっていくつもりである。

田丸仁 *Calcutta Chromosome*

参考文献

Ghosh, Amitav. *The Calcutta Chromosome*. 1995. New York: Perennial-HarperCollins, 2001.

Chambers, Claire. "Networks of Stories: Amitav Ghosh's *The Calcutta Chromosome*." *ARIEL: A Review of International English Literature* 40.2-3 (2009): 41-62.

---. "Postcolonial Science Fiction: Amitav Ghosh's *The Calcutta Chromosome*." *The Journal of Commonwealth Literature* 38.1 (2003): 56-72.

Mondal, Anshuman A. *Amitav Ghosh*. Manchester: Manchester UP, 2007.

Romanik, Barbara. "Transforming the Colonial City: Science and the Practice of Dwelling in *The Calcutta Chromosome*." *Mosaic: A Journal for the Interdisciplinary Study of Literature* 38.3 (2005): 41-57.

Vescovi, Alessandro. "Amitav Ghosh in Conversation." *ARIEL: A Review of International English Literature* 40.4 (2009): 129-141.

もり いずみ 「マラリアを伝播する蚊を突きとめた—ロナルド・ロス」
『Newton』第21巻12号 2001年 118—123ページ